中原親能は鎮西奉行だったか

中原親能は京都の公家出身でありながら、源頼朝の挙兵時に京都から鎌倉に下り、側近として初期鎌倉幕府の政権中枢を担った人物です。鎮西奉行は幕府の九州統治のための出先機関で、同じく頼朝の側近であった天野遠景を初代とします。鎮西奉行の評価には諸説あり、遠景の後任として親能を認めるかどうかが争点の一つになっています。

遠景を解任し、その代わりに親能を鎮西奉行に補任したことを示すのが、建久6(1195)年5月日付将軍家政所下文案です。しかしこの文書は使用されている文言、形式から偽文書であることが明らかで、これを信憑性のないものと切り捨てるか、偽文書ではあるものの内容には否定しがたい事実があると考えるかで、まず理解が異なります。

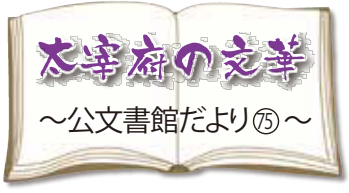
さらに、親能は鎮西奉行に任じられた建久6年当時、九州に下向せずに京都にいました。頼朝の直接の指示を受け、九州現地にあって全域に権限を行使した、遠景の軍事的性格とはかなり異なるため、鎮西奉行としての連続性を疑問視する見方があります。

一方、親能は豊後大友氏の初代能直を養子としています。大友氏は相模国大友郷を本拠とし、能直のときに豊後・筑後守護に任じられたとされます。蒙古襲来時には親能の孫頼泰が、実戦の総指揮者として、戦後には勲功認定・恩賞配分などで武藤氏とともに九州御家人の中心的な役割を果たしました。

この頼泰のことを「東方奉行所」「東方守護所」と記す史料があります。また、武藤資能に比定される「西方守護人」「太宰府西守護所」という表記を含む史料も残ります。武藤氏が大宰府を本拠としていたことは知られていますが、大友氏も文永期(1264-75)頃、大宰府に滞在し政務を行っていたことが明らかにされています。これらのことから、武藤氏・大友氏のことを「鎮西東・西奉行」と呼んで、遠景に連なる鎮西奉行と認定する考えがあります。

鎮西奉行の定義や時期により果たした役割の違いなどはありますが、確かに、武藤氏と大友氏は鎌倉期の九州御家人の中で優位な存在であり(広報令和2年1月1日号参照)、その淵源を両氏の鎮西奉行就任に求める説は、説得力を持つものと考えます。

(公文書館・朱雀　信城)



市ホームページアドレス　http://www.city.dazaifu.lg.jp/